



サッチャリズムの社会的矛盾

——ホームレスの急増と人頭税制の混乱——

小林 昭

1990年夏の再訪英で最も印象的だったのは、ホームレスの急増と人頭税制の混乱である。The London School of Economics に隣接する有名な広場 Lincoln's Inn Fields にも、夕方になるとテントやダンボールを抱えた一見サラリーマン風の人々が現れ、慈善家とおぼしき紳士連れがパン入りの箱を届ける光景が見られた。かつてはテムズ河沿いの Embankment など特定の場所に限られていた彼らの姿が至る所に現れるようになったのが、最近のロンドンの世相である。Peter Hall は "Samizdat" 誌の夏季号で、この問題こそサッチャリズムによる都市の暗影の象徴だとし、ロンドンがディケンズ時代に逆戻りしてニューヨーク化が進んでいると警告した。またロンドン特別区協会は、10月末、公共住宅の欠乏から3万2,000余の家族が一時しのぎの宿泊施設に居住し、健康・衛生・安全上の危険や心理上・教育上のダメージが深刻化していると報告した。

サッチャー辞任直後 "The Economist" 誌 (Nov. 24. 1990) は、12年に及ぶサッチャー政権のパラドックスと矛盾を皮肉まじりに列挙した。国家の経済的権限の削減と中央政府の政治力強化、インフレの抑制と再昂進、経営者の管理権強化と50年来最悪の不況到来・失業者急増、労働組合の粉碎と再生、高額所得者の所得税率半減と付加価値税増税・人頭税導入、労働党の基盤破壊と同党の自己変革・党勢活性化、そしてなかならずく持家所有者とホームレスの急増である。この最後の問題に代表される社会的・地域的な貧富の格差拡大、国民の分裂と社会的紛争の激増こそ、人頭税制への反発・混乱とともに、サッチャー辞任の底流になったといえよう。

人頭税 (Community Charge) は、不払闘争や税率統制をめぐる法廷闘争等の渦中で、混乱をきわめていた。人頭税反対集会は毎週各地で開かれていたし、未納の故に法廷に喚問された人々を支援する集会もハムステッドの裁判所前で実現した。8月上旬イングランド平均で納税者の4分の1が未納のままであったし、10月中旬になっても徴収率はイングランド平均で45%、ロンドンは39%にすぎない。何よりも深刻なのは、人頭税2年目のスコットランドで実証済みのように、徴収見込みの立たぬまま次年度の予算が編成され、人頭税々率の大幅な引上げが不可避となることである。引上率は平均25%と9月中旬に報じられた。そうなれば人頭税への抵抗は一層強まり、滞納一税収不足一税率引上げの悪循環がくり返されて、人頭税の逆進性と不公平は一層増幅し、自治体の財政運営は極度に困難となるであろう。

新メジャー政権の下で環境省大臣に再就任したヘゼルタインは、人頭税制の改革（税率に段階設定）と教育行政の中央移管の方針を提示したという。人頭税の矛盾緩和をはかるこの改革案は、しかし、地方行政機能の一層の縮小を招くのみならず、カウンティ廃止をふくむ地方制度改革に連動しかねないし、政権が労働党に移れば不動産税（レイト）復活という地方税制再改革が必至であろう。90年代は改めて、イギリス地方行財政・地方自治の再編成をめぐる苦難と流動の時期にならざるをえない。サッチャリズムの時代は終りつつあるが、80年代のサッチャリズムが激増させた社会的諸矛盾修復の前途は、まことに多難であるといえよう。

(金沢大学経済学部教授)